

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 12 日現在

機関番号：12701

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K21000

研究課題名(和文) 明治期の詠史詩集の研究 大沼枕山『歴代詠史百律』『日本詠史百律』を中心として

研究課題名(英文) A Study of Meiji Anthologies of Historical Poems With a Focus on Ohnuma
Chinzan's Rekidai Eishi Hyakuritsu and Nihon Eishi Hyakuritsu

研究代表者

高芝 麻子 (TAKASHIBA, ASAKO)

横浜国立大学・教育学部・准教授

研究者番号：80712744

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：主な成果は以下の三点である。幕末から明治前半期の著名な漢詩人大沼枕山の著した『歴代詠史百律』という詠史詩(歴史を詠じる詩)の詩集について詳細な訳注を施した。当時の詠史詩集編纂ブームの状況を調査、分析し、詠史を百首集めた詩集が相次いで刊行されていることを明らかにした。日本人が中国の歴史故事をどのように日本文学(軍記物や謡曲など)や日本語の語彙に取り込んでいったのかについて、その一端を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The main results were as follows: (1) the Rekidai eishi hyakuritsu, an anthology of historical poems (eishishi) by the renowned Sinitic poet Ohnuma Chinzan of the Bakumatsu period and first half of the Meiji era, was translated into modern Japanese with detailed notes; (2) the contemporary boom in the compilation of anthologies of historical poems was investigated and analyzed, and it was shown that several anthologies of one hundred historical poems were published; and (3) certain aspects of how the Japanese incorporated Chinese historical events into Japanese literature (martial tales, Noh songs, etc.) and into the lexicon of the Japanese language were elucidated.

研究分野：唐詩・日本漢詩

キーワード：大沼枕山 詠史詩 歴代詠史百律

1. 研究開始当初の背景

幕末から明治期に強い影響力を持つ漢詩人大沼枕山の研究は、すでに一定の蓄積があるが、その多くは江戸期の枕山詩に対するものであり、明治期の枕山詩、ことに『歴代詠史百律』『日本詠史百律』への専論は比較的少ない状況にあった。『歴代詠史百律』『日本詠史百律』刊行当時の日本においては、詠史詩集の編纂が盛んであり、大沼枕山は明治期には詩集をほとんど刊行していない中において、そのうちの二つまでが詠史詩集であることは注目に値する。この詠史詩集の訳注を作成し、その背景となる詠史詩集ブームについて検討することで、明治期の漢詩壇や漢詩人の在り方について理解を深めることができるのではないかと考え、研究を開始した。

2. 研究の目的

大沼枕山は漢詩人として知られる知識人であるが、江戸時代には幕府に仕えず、明治期になっても政府高官らとの交際を積極的に求めることはなく、鬚を結い続けた。

第一の目的は、そのように政府と距離を置く枕山が、様々な視点から政治に言及する詠史詩集を分析することで、枕山の歴史観や当時の社会に対する見方、あるいは漢学を学びながら詩人としての人生を選び、政治に関わらずに生きた自分自身をどのように捉えていたについて、明らかにすることである。

第二の目的は、幕末から明治期の詠史詩集ブームの実態を明らかにすることである。その上で、当時の歴史観や史実への解釈、漢詩で歴史を詠じることの意味、漢詩の実作人口の多かった幕末明治期における漢詩というメディアの働きなどについても分析する。

3. 研究の方法

研究の方法としては、まず『歴代詠史百律』の訳注を作成しながら、その内容について分析を行った。日本史を扱う『日本詠史百律』ではなく、中国史を扱う『歴代詠史百律』を先に検討することとしたのは、漢籍を踏まえて作られる『歴代詠史百律』の訳注を附すことが、まず漢学に造詣の深い漢詩人大沼枕山の本領を見て取ることができると考えたためである。その訳注や分析の作業の中で、枕山が目撃した資料を可能な範囲で特定し、当時の中国史の受容について考察を加えた。

同時に、現存する書籍の調査を行い、幕末から明治期の詠史詩集編纂ブームの実態について明らかにする。特に絶句もしくは律詩を百首集める詩集を重点的に調査し、そこに採録される作品の傾向、特にどのような歴史上の人物や史実が好んで描かれるのかについて整理し、なぜ詠史詩集が流行したのか、当時の社会情勢との関わりの中で分析した。

さらに、『歴代詠史百律』の訳注を附す中で見いだされた中国史の受容に関わる諸問題を分析することで、幕末明治期の日本における中国史の理解を確認し、日中の差異や時

代ごとの差異などについて考察を加えた。

4. 研究成果

(1)

研究成果として最も大きいものは、大沼枕山『歴代詠史百律』の訳注原稿を作成したことである。意味を明らかにすることに留まらず、史実と詠史詩の関係、枕山の依拠した文献資料の検討なども行い、また、枕山がどのような歴史観、国家観、あるいは自己認識や理想をもって歴史を詠じていたのかについても考察を加えることができた。その成果物は、まだ出版には至っていないが、2019年度の出版を目指している。

(2)

幕末から明治にかけての詠史詩集のブームについて、その一端を明らかにし得たと考えている。詠史詩の制作は江戸時代にはすでに広く行われており、幕末になると詠史詩のみを編纂した詩集が多く刊行された。そのうち、「百絶」「百律」として詩型を揃えるなど一定の体裁のもと百首あるいはそれ以上の、日本人の作った詠史詩を集めるものを以下に挙げる。

羽倉用九『詠史』
 小林至静『畏堂詠史百絶』
 東塾『詠史百絶』
 阿部省『皇朝詠史』
 大槻磐溪『国史百詠』
 青山延寿『読史雑詠』
 角田錦江『詠史百絶』上下
 谷合南涯『日本英雄百絶』
 河口寛『海外詠史百絶』
 中村正郷『詠史百絶』
 竹内東仙『皇朝詠史百絶』
 小菅揆一『前哲百詠』
 大沼枕山『日本詠史百律』
 中村正郷『詠史百律』
 大沼枕山『歴代詠史百律』
 中島蒿『詠史百絶奇哉対』
 山本栗斎『詠史百絶』
 菊池三九郎『瀛史百詠』
 福田宇中『詠史百絶』

大正以降も百首集めた詠史詩集は作られ続けるが、主に明治期までの詩集について検討した。中国史のみを扱うものは羽倉用九『詠史』、角田錦江『詠史百絶』下巻、大沼枕山『歴代詠史百律』の三種であり、ほとんどの詠史詩集は日本史を中心に詠っている。また、百律は大沼枕山と中村正郷が作っているものの、七言絶句を百作収めるものが主流であった。大槻磐溪、青山延寿、大沼枕山のような著名な学者や詩人のみならず、角田錦江、中村正郷、福田宇中など日本各地の漢詩愛好者が詠史詩集を編纂していることも特徴的である。

これらの検討成果については(1)の訳注とあわせて書籍にまとめる予定である。

なお、清代の中国においても詠史詩集の編

纂がしばしば行われている。この清の詠史詩集が日本の詠史詩集編纂ブームに関わるのかどうかについては、今後の課題としていきたい。

(3)

中国史を題材とした日本人の詠史詩作品を読み解いていく上では、日本における中国史や人物がどのように理解され、あるいは語彙や表現がどのような意味で受け入れられていたのかについて検討する必要がある。幕末・明治期の詠史詩理解を深めるために、楊貴妃や荊軻、秦始皇帝ら、歴史上の人物が日本文化の中でどのように描かれてきたのかについて、日中の比較と時系列とを踏まえ、検討した。その結果、原則として史実に即した事実が描かれている場合であっても、そこに込められた心情に差があることが明らかになった。例えば、始皇帝であれば、中国古典においては肯定的に評価されることは少ないが、日本古典においてはしばしば肯定的に扱われ、室町幕府の将軍を言祝ぐにあたり将軍を始皇帝になぞらえることさえ行われている(謡曲「始皇帝」)。これらの心情の差異は日中の国家制度の違いに由来するのではないかと考えられる。楊貴妃、荊軻と始皇帝についてはすでに口頭報告を行ったが、改めて論考としてまとめ、2018年度内に発表する予定である。

また、日本語の中に歴史故事が取り込まれた例として、故事成語についても検討した。「漁夫の利」「心頭を滅却すれば火もまた涼し」の二例について、前者は擬人法という手法の側面から、後者は語彙の変遷という側面から論じて、発表している。

(4)

大沼枕山を初めとする幕末から明治期の詠史詩の作者がいかなる書籍を参照していたのかを検討していく過程で、漢詩を作るための参考書あるいは類書が存在が非情に重要であることが明らかになった。例えば、大沼枕山の蔵書には『詩韻合璧』が含まれているなど、大家であっても参考書を用いており、かつ大沼枕山自身、『詩語抜錦』という作詩のための参考書の校閲に当たっている。

日本で広く流通していた、作詩のための参考書にどのような個性があるのか検討したところ、『円機活法』の影響を受けた中国式の天地人による分類方法を用いる参考書が江戸中期ごろまでは主流であったものの、江戸中期以降には四季+雑の分類方法が主流となっていくことが分かった。その変化は漢詩の詩作人口の急増と時期を同じくしていることから、この分類方法の日本化が詩作人口の増加と相関関係にあることが窺える。その分類上の変化について、論文「江戸期の初学者向け作詩教本に見える分類方法について」において論じた。

上記論文には論じることができなかった

が、詠史詩ブームに関わる点としては、雑の部に詠史の項目を立てる作詩の参考書も散見する。初学者が用いるような参考書にも詠史詩への言及があるということは、詠史詩ブームの裾野の広さを裏付ける一つの傍証となるであろう。

(5)

上記(4)の検討を踏まえ、江戸から明治期にかけて、漢詩初学者が漢詩の実作を学ぶときに用いていた手法を援用し、現代の国語教材とする試みを行った。詩語をカード化した教材を用い、中学校・高等学校・大学において漢詩実作の授業を行い、七言絶句の実作に取り組んだ。その成果を論文「漢詩実作教材「漢詩カード」試論 中学校・高等学校での教材として」に発表した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

高芝麻子「漢詩実作教材「漢詩カード」試論 中学校・高等学校での教材として」『横浜国大言語教育研究』43号 P2-9、2018
(査読なし)

高芝麻子「「漁夫の利」の動物たちはなぜしゃべるのか 『戦国策』に見える擬人法」『古典教育デザイン』3号 P48-56、2018
(査読なし)

高芝麻子「江戸期の初学者向け作詩教本に見える分類方法について」『新しい漢字漢文教育』63号 P20-30、2016 (査読あり)
高芝麻子「「滅却心頭火自涼」の意味するもの」『中唐文学会報』23号 P19-35、2016
(査読なし)

[学会発表](計2件)

高芝麻子「「長恨歌序」と日本文化の中の楊貴妃」2018/3/17 (古典教育デザイン研究会秋季大会)

高芝麻子「詩文に見える荊軻イメージの変遷」2017/10/1 (古典教育デザイン研究会春季大会)

[図書](計0件)

[産業財産権]

出願状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高芝 麻子 (TAKASHIBA ASAKO)
横浜国立大学・教育学部・准教授
研究者番号：80712744

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()